UP選書

日本文学の近代と反近代

三好行雄

東京大学出版会

UP選書

日本文学の近代と反近代

三好行雄

東京大学出版会

著者略歴

1926年　福岡県に生まれる
1950年　東京大学文学部国文学科卒業
現　在　東京大学文学部教授

主要著書

『島崎藤村論』(1966年，至文堂)
『森鷗外』(近代文学注釈大系，1966年，有精堂)
『作品論の試み』(1967年，至文堂)
『日本の近代文学』(1972年，塙書房)

現住所

東京都杉並区本天沼 2-42-5

日本文学の近代と反近代　UP選書105

1972年9月30日　初版

検印
廃止

©著者　三好行雄
発行者　福武直

発行所　財団法人　東京大学出版会
113　東京都文京区本郷　東大構内　電話 (811)8814　振替東京59964

精興社印刷・矢島製本

1395-06050-5149

日本文学の近代と反近代／目次

近代文学の諸相……一
——谷崎潤一郎を視点として——

*

日本の近代化と文学……九六
反近代の系譜……二三
漱石の反近代……一四九
詩的近代の成立……一五九
——光太郎と茂吉——

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

*
白樺派の青春……一八五
芥川龍之介の死とその時代……二〇四
*
私小説の動向……二三五
あとがき

近代文学の諸相

——谷崎潤一郎を視点として——

教師と小説家

斎藤緑雨といえば、明治二十年代に正直正太夫の仮名で知られた有名な毒舌家だが、その緑雨が当時の指導理論家と目された鷗外にはげしく嚙みついたことがある。明治二十四年に宮崎三昧という三流作家が匿名で自作を批評し、緑雨がそれを咎めたのに端を発して論争がおこった。いわゆる自評論争である。その過程に介入して、鷗外がシルレルやハウフの例をあげて三昧を弁護したとき、緑雨はただちに反駁して、つぎのように書いた。

《シルレルなればとてハウフなればとて善き事は善き事なり悪き事は悪き事なり古今の大家に例少からざるがゆゑに問はずといふの漁史は、大家のなしゝことは一も二もなく宜しとして世を挙げて然なきだに模倣の世たらしめんと欲するか》（「鷗外漁史の弁護説」）

論争自体は時代の幼なさをいたずらに印象づけただけで、いまとなっては、おそらくなんの意味もない。しかし、それにしても、緑雨の批判は鷗外の批評原理をほぼ正確に衝いている。自評論争とおなじ年に逍遙・鷗外の没理想論争もたたかわれているが、仏教からキリスト教にいたる思想の領域をすべて比喩とする、この壮大な論争で、鷗外はE・H・ハルトマンの観念論美学によって論をたてた。シルレルといい、ハルトマンといい、これら西欧の〈大家〉は、鷗外にとって唯一無二の拠るべき批評の基準だったのである。

しかし、これは鷗外の批評原理というより、日本の近代文学の成りたちそのものとも密接な関係がある。鷗外の相手どった逍遙にしても、かれの説くリアリズムは、帝国大学文科大学で吸収した英文学の知識を下敷きにしていたし、逍遙の写実主義をより徹底させたといわれる二葉亭四迷はロシヤ文学、とくにベリンスキーらの文学理念に学ぶところが多かった。たとえば逍遙が「小説神髄」を書いたとき、この先駆的な文学論によって理念としての小説様式はいちはやく成立したが、日本語で書かれた小説はまだどこにも存在しなかった。逍遙は西洋を見ながら、その西洋のめがねで江戸の浮世草子を見なおすよりしかたなかったのである。おなじ事情は鷗外や二葉亭にもあてはまる。かれらは無から有を生みだすために、刻苦して西洋を学ばねばならなかった。

日本の近代文学を主導した知識人たちは、みな例外ではない。その系譜は明治四十年代の漱石や荷風にまで辿れるが、かれらは小説家であると同時に学者であり、教師であることを強いられたの

である。みずから学びながら、学ぶことで、後続する世代へのかけがえのない師であらねばならなかった。その間の事情は、かれらがいずれも有能な翻訳家であった事実にもうかがわれ、また、もっと端的には、指導的な役割をはたした当時の批評家たち、たとえば逍遙・鷗外をはじめ高山樗牛・上田敏・島村抱月らに共通する強い使命感と明瞭な啓蒙家の姿勢に象徴されている。

むろん、これは単に文学だけの問題ではなく、ひろくいえば文明開化という、日本の近代化方式のひとつの現われにすぎない。〈散切頭を叩いてみれば文明開化の音がする〉と明治初年の俗謡ではやされて以来、ヨーロッパ文明の移植による近代社会の建設はわが国の知識人に課せられた最大の任務であった。〈追いつけ追い越せ〉という、国をあげての応援歌がうたわれたのである。

江戸文人の気質をひく緑雨はそうした時潮への最後の抵抗者であった。緑雨の先達には明治七年に「柳橋新誌」第二篇を世に問うた成島柳北がいる。しかし、かれらの抵抗は論理に論理を対置するという形をとらず、思想や論理以前の体質的な反撥にとどまっていた。かりにそうでなかったとしても、この種の論点を思想として有効に論理化するために、日本の近代はまだ、あまりにもおさなすぎた。おなじ江戸戯作の流れを汲む硯友社の作者たちは、国木田独歩が的確に批評したように、〈洋装せる元禄文学〉の道を選んだのである。

しかし、柳北や緑雨のおいた最初の一石はやがて明治四十年代にはいってから、逆に漱石や鷗外によって拾われることになる。漱石は「現代日本の開化」という有名な講演で、外国の圧力によっ

てむりやりに開化させられた外発文明の危うさについて警告し、鷗外は芸術や学問の自由は〈遠い遠い西洋のこと〉という悲痛な認識を語った（「夜中に思つたこと」）。荷風がおなじく物質文明の形骸的な模倣を嫌悪し、花柳狭斜の頽廃に身をひそめたのもよく知られている。柳北を再評価したのもおなじモチーフからである。

近代化の推進者はここで告発者に転じた。逆説と聞えるかもしれぬが、かれらにそれを強いたのは、ほかならぬ日本の近代社会そのものの成熟であった。近代化のためのながいジグザグな過程を経て、実質的な近代社会がまがりなりにも成立したとき、漱石や荷風は自己の理念と比較できる対象をはじめて手に入れたのである。

文学的には、近代散文芸術としての小説の本格的な定着が、近代社会の全般的な成熟とほぼ見あう形で実現している。明治四十年代には自然主義・非自然主義のさまざまな文学傾向があらわれ、多彩な資質の開花が見られたが、そのもっともめだった現象のひとつに口語文体の完成がある。この時期以後、口語は小説の唯一の文体となったが、これも近代散文精神の成立を告げるメルクマールのひとつであった。

こうして、さきの比喩でいえば、教師から小説家への世代の移行がある。明治四十三年に創刊された「新思潮」（第二次）や「白樺」に拠る新人作家たち、たとえば谷崎潤一郎や志賀直哉らにとって、小説はすでに自明の形式として眼前にあった。小説のはらむ無限の可能性をうたがう必要はも

うない。かれらは学者でも翻訳家でも、まして教師でもない、他のなにものでもない小説家として自己を出発させる。

谷崎は荷風の推賞によって、みずからバイロンに比したほどのはなばなしさで文壇に出た。谷崎が荷風の「あめりか物語」に芸術上の血族を発見し、そして「刺青」を荷風が認めたとき、師から弟子へ、時代の歯車はカタリと音をたてて廻ったのである。谷崎がワイルドなどに近づいて悪魔主義へ趨ったのは事実だが、かれにとって西洋はもはや刻苦して学ぶ対象ではなかった。それはもっと身丈にあった衣裳であり、等身大の鏡だったのである。

サロンの季節

一八八〇年、つまり明治十三年である。日本では近代小説の最初の一歩さえまだ踏みだされていなかった頃、フランスで普仏戦争に題材をとった短篇集「メダンの夕べ」が刊行された。モーパッサンやユイスマンなどゾラの周辺にいた若い作家たち――ゾラのメダンの別荘に集って文学論をたたかわせた、いわゆる〈メダンのグループ〉が執筆した短篇集である。モーパッサンの「脂肪の塊」もここに載ったが、自然主義派の存在を明確にした歴史的な記念碑でもある。ヨーロッパの芸術運動では、芸術家のサロンが温床として大きな役割を果すことが多い。さしあたって、メダンの

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

会などは典型的な例のひとつといえよう。

このメダンのグループにしばしば擬せられるのが、わが国の自然主義の母胎となった竜土会である。明治三十四年頃、柳田国男の自宅でもたれていた小集会が濫觴で、その後、早くからサロンの必要を力説し、琴天会などを催していた美術史家の岩村透らも合流し、明治三十七年前後には麻布のフランス料理屋竜土軒に会場を移して、竜土会と称する大きな会合にまで成長した。常連の出席者には田山花袋・国木田独歩・島崎藤村・徳田秋声らがあり、その他画家・詩人など、きわめて多彩な顔ぶれを集めていた。前身の琴天会の雰囲気は、常連のひとりだった蒲原有明の「琴天会に寄す」という詩篇にたくみに写されている。有明の詩は〈美酒、ほほゑみ、ともに匂ひかはし／甕より、はた面よりあふれいでぬ〉とうたいだされるのだが、その〈巴里の園生〉をしのび、〈伊太利の旅路〉を思うはなやかな集いが竜土会に成長したとき、たとえばモーパッサンに触れて地上を視る目を発見したロマンチスト花袋の感動なども、おそらく熱っぽく語られたにちがいない。

こうして、近松秋江の言葉を借りていえば〈自然主義は竜土会の灰皿から生れた〉。自体としては情熱的で、ロマンチックな集会から無理想・無解決を標榜する自然主義の文学運動が誕生したのはやや奇妙だともいえるが、藤村はもとより、花袋や独歩にしても、もともと抒情詩を最初の自己表現とした文学者である。日本の自然主義は浪漫主義の自己否定もしくは自己転身として胎動してきたわけで、竜土会と自然主義の関係もその間の事情とほぼ見あうところがある。だから、大正二

年前後まで存続した竜土会も、実はその命脈は自然主義の成立とともに尽きたといえる。事実、明治四十一年六月に独歩が病没して以後、会は急速に衰微するが、これは有能な世話人をうしなったからというだけでなく、やがて顕在化してゆく自然主義の閉鎖的性格が、サロンの成立を不可能にしたという事情も他の半面にはある。竜土会は自然主義の母胎ではあっても、運動体とは決してなりえなかったのである。

竜土会が衰微期にはいった明治四十一年の十二月十二日に、隅田川沿いの両国公園内のレストラン第一やまとで、パンの会の第一回の会合が開かれている。翌月に「スバル」を創刊するはずの木下杢太郎・吉井勇・北原白秋らの詩人と、美術雑誌「方寸」に拠る山本鼎・石井柏亭らの画家が協力して、青年芸術家の談話会をおこそうとする最初の試みであった。ギリシャ神話の Pan（牧羊神）にちなんだこの会も隅田川をセーヌになぞらえ、巴里を東京にうつす甘美な夢がわかわかしい情熱を織っていた。見方によれば、竜土会の命脈を継いだともいえるが、当代一流のパルナシヤンをあつめて、より徹底して耽美・享楽の風を追い、青春歓楽の美酒に酔ったのである。比喩としていえば、メダンのグループとほぼおなじ頃に、詩人マラルメの自宅で開かれていたという火曜会を彷彿させる集いであった。

パンの会はその後、会場を隅田川下流の永代橋のほとり（永代亭）に移し、日本橋大伝馬町（三州屋）に移してつづけられるが、竜土会が山の手に会場をもとめたのに対して、この会はつねに下町

の江戸情調を追うところに鮮明な特色があった。白秋や杢太郎の小唄ぶりに通じるこの江戸趣味は、明治の〈現実〉を批評する眼の代償である。かれらにとって、パリも江戸も、そこに不在の憧憬の対象にほかならない。失われた世界を架空に構築し、心情の避難所とする姿勢が明瞭なのだが、そのこと自体は〈現実〉へ下降して自己を閉鎖した自然主義の裏返しとして、明治文学のひとつの帰結と見ることができよう。

しかし、パンの会はその反自然主義的な性格によって、同時に大正への架橋を用意することになった。明治四十三年十一月、会はあらたに創刊されたばかりの「三田文学」、第二次「新思潮」、「白樺」の諸同人に招待状を発している。谷崎潤一郎がはじめて出席したのはこの会である。のちに「青春物語」でみずから回想するように、永井荷風にはじめて会った興奮から、〈わざと先生の見えない所へ逃げて来て、「永井さんえ！　永井さんえ！」と、やりての婆さんが花魁を呼ぶ口調で怒鳴つた〉りした。潤一郎の大袈裟な挨拶を迎えて、荷風はいささか迷惑そうだったとも回想しているが、そうした個人的な関係を別にしても、この日の出席者はスバル同人はもとより、武者小路実篤・里見弴・柳宗悦・和辻哲郎・後藤末雄・久保田万太郎など、まことに多彩である。前章の比喩をくりかえしていえば、教師と小説家をあわせつらねて、反自然主義戦線の大同団結が成った観がある。パンの会自体はこの四十三年十一月の大会を境に、皮肉にも下降期にはいるが、ここで実現した新人作家群の交流はそのまま大正期文壇の見取り図を示している。むろん、実篤と潤一郎、

白樺と新思潮の異質はおのずから明らかであって、それはやがて大正文学の構造を決定することになった。

最後に、竜土会、パンの会と併行して、夏目漱石宅に寺田寅彦・小宮豊隆・鈴木三重吉・森田草平らが集った木曜会がある。明治三十九年以降、漱石の死までつづくが、「朝日新聞」文芸欄の母胎ともなって、大正期のリベラリストを多く育てた。鷗外が斎藤茂吉らのアララギ同人と、白秋以下のスバル同人を自宅に招き、〈国風の新興を夢みた〉観潮楼歌会も忘れがたいが、こう見ると、明治四十年代の文壇は時ならぬ〈サロンの季節〉を迎えていたようである。それらのサロンの内部で、明治から大正への架橋が準備されていた。

人道と悪魔

明治四十五年四月七日の志賀直哉の日記に、つぎのような記事が見える。

《父と話した。自家の財産を帳面によつて調べて話を聞いた。……自分は、財産のあるといふ事が自分を下らぬ事で束縛しない――その自由を与へてくれる事をありがたく思ふた。……自分は自分の自由を得てゐる、自分の家庭を祝福するやうになるだらう。》

直哉の青春が父との抗争に明け暮れたことはひろく知られている。日記の記事はこの前日にも

〈生活問題〉で多少のいさかいがあったらしいことを伝え、ほぼ半年後には、父との不和がゆきつく結論として家を出ることになる。直哉がその青春の自画像を「大津順吉」に描いたのは、すでに大正に改元されたおなじ年の九月である。そうした時期の感想としていささか手前勝手だともいえるが、それにしても直哉のこの率直な自覚は、白樺派の文学がどういう場所から出発したかを明確にしめしている。

《金がなくなると、神田の知つてゐる古本屋で一番高く買ひ取る書名を聴いては丸善とか中西屋でその新しい本を買ひ、俥で運んで金に換へた。丸善や中西屋は自家へ払ひを取りに行くから幾らでも本を渡して呉れた。》

直哉の小説「廿代一面」によれば、かれの家庭はこういう自由も許してくれたのである。飢餓からの自由である。そして、その飢餓からの自由という特権を、いわば個性の自由を守るための城砦と化して、自我独創の強烈な論理が編まれたのである。

直哉のいう財産は、維新の動乱期からながい時間をかけて育った商業ブルジョアジイの獲得したものである。その意味でも、白樺派はまぎれもなく二代目の文学であった。直哉だけでなく、かれの僚友たちは多かれ少なかれ、おなじような二代目の自由を意識的な特権と化して自己の文学をつむいだのである。母の実家を継いだ里見弴が、養家の財産を確かめてから小説家としてたつ決意をかためたというエピソードなどにも、その間の事情がたくまずして語られている。

むろん、それを咎めることはできない。武者小路実篤が「桃色の室」で明快に説いたように、特権もまた運命であり、宿命である。運命のうながすモラルをみずから選びとることもまた作家の誠実というものであろう。

しかし、そうはいっても、かれらの自我形成の過程がきわめて求心的な、現実との通路を絶って成りたつ閉鎖した世界の劇であったことは否定できない。実篤のいう〈幸福になるべき運命〉は当時の社会構造の内部では、なお例外的な状況にすぎなかった。そのことを理解するためには実篤と同年の作家に、〈時代閉塞の現状〉をするどく衝いた石川啄木のあったことを想起するだけで充分であろう。

念のためにいえば、田山花袋の「田舎教師」の主人公、ロマンチックな情熱に魅せられながら、貧しいがゆえに、片田舎の一助教として朽ちてゆく青年もまた白樺派の諸作家とほぼ同世代である。

白樺派の作家が〈自我〉について語るとき、実はかれらの自我は自我を成りたたせる環境を不可分の条件としてのみありえたわけで、だから、その哲学が思想としての普遍性や自律性を獲得するのははじめから不可能だったともいえる。そうした求心性——もしくは遠心力の欠如が——いっぽうで純粋な市民意識の成立をもたらしながら、他方では、思想をたえず肉体へ還元する固有の思考形態を生むとともに、文学的な虚構の可能性を閉ざすことになったのは自明である。有島武郎を唯一の例外として、ほとんどの作家が私小説への傾斜をまぬがれなかったゆえんでもある。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.